

## 開会の挨拶



森 亘（日本医学会長）

私は日本医学会で会長を仰せつかっている森でございます。第124回日本医学会シンポジウムの開会に当り、一言ご挨拶申し上げます。このシンポジウムにみなさま方のお出ましをお願いいたしましたところ、それぞれ大変お忙しい中、また非常に遠方からもお出かけいただき、ありがとうございます。まず、心から御礼申し上げます。

これが第124回ということですが、私どもは通常、シンポジウムを1年に3回開いておりますので、単純に計算いたしますと40年の歴史があることになります。その仕組みについて、みなさま方は必ずしもご存じではないかもしれませんがご紹介いたしますと、まず私どもはシンポジウムのための企画委員会なるものをもっております。そこで企画委員の先生方にお集まり願ひ、次のシンポジウムにはどのようなテーマを選ぶかというお知恵を拝借します。そこでこういうテーマがふさわしいのではないかとすると、その次に組織委員会を出発させ、組織委員の方々にそのテーマの下にどのような題目がよいか、どのような方々にお話をしていただくのがよいかなど、再びお知恵を拝借します。

今回はプログラムにも書かれていますように、住友病院の松澤佑次先生、京都大学の中尾一和先生、東京大学の永井良三、門脇孝両先生が快く組織委員を引き受けてくださり、そうした方々のご努力によってこのプログラムが完成した次第です。組織委員の先生方のご推薦に基づいて、演者あるいは討論者

を当方からお願いいたしました。ほとんど全員の方にお引き受けいただけましたことは大変幸いでした。深く感謝申し上げます。

このたびのテーマは「肥満の科学」です。肥満の科学について私として格別深い印象を抱いている事柄もございませんが、実は数年前に米国科学アカデミーの中のInstitute of Medicine (IOM)の年次総会のテーマが肥満でした。非常に幅広い論議が行われましたが、一部公開だったために、その折には大変太った市民が何人も見えていました。私はその昔、米国には本当に太った人がいて、普通のバスの乗降口を通ることができないほどだと教えられましたが、IOMの肥満の会にオブザーバーのようなかたちで、何人もの超肥満に悩んでいるように見受けられる方が来ておられたことは、非常に印象深い光景としていまも覚えております。

今回の集まりは、日本医学会シンポジウムの中では年1回のクローズドの会議で招待された方のみ、ましてや一般市民の方の参加はございません。ですから、今日の段階ではやや不確定のことであっても、ストレートにお茶の間に流れては多少問題があるような事柄であっても、どうかご遠慮なくご発言いただきたいと存じます。

私自身は肥満に関して専門家でも何でもありませんので、特別申し上げることはございませんが、私が現役であったころ、肥満といえますと単にデブということだけでした。いわば形態学的に、難しい言葉を使えば器質的

---

な事柄ばかりを考えていた。それにしてもあまり内容のある課題はなかったように思います。ところが最近ではいろいろ機能的な問題が取り上げられるようになり、ただ単にバスの乗り降りが不便だといった問題ではなく、種々の病態と深く関連した状態が肥満の本質であるという理解が得られているように感じ

ます。私たちが現役の時代とは違った新しい観点から、明日、明後日、肥満についていろいろとお教えいただけるということで、私自身、楽しみにいたしております。以上、開会に先立ちましてご挨拶申し上げます。なにとぞよろしく願いいたします。